



Common Event Infrastructure

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、49ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、WebSphere Process Server for z/OS バージョン 6、リリース 0、モディフィケーション 2 (製品番号 5655-N53) および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

IBM 発行のマニュアルに関する情報のページ

<http://www.ibm.com/jp/manuals/>

こちらから、日本語版および英語版のオンライン・ライブラリーをご利用いただけます。また、マニュアルに関するご意見やご感想を、上記ページよりお送りください。今後の参考にさせていただきます。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： WebSphere Process Server for z/OS
Version 6.0.2
Common Event Infrastructure

発 行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2007.3

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 2006, 2007. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2007

目次

第 1 章 Common Event Infrastructure 構成の除去	1
Common Event Infrastructure アプリケーションの除去	1
イベント・メッセージング・エンタープライズ・アプリケーションの除去	2
イベント・データベースの除去	2
第 2 章 Common Event Infrastructure の管理	5
インストール後の構成	5
イベント・データベースの構成	5
Common Event Infrastructure アプリケーションのデプロイ	24
イベント・メッセージングの構成	26
ランタイム構成	29
デフォルト構成	29
イベント・サービスの構成	31
DB2 データベース保守	33
イベント・データベースからのイベントのパージ	34
第 3 章 Common Base Event ブラウザーでのイベントの表示	39
表示するイベントの指定	39
イベント・ブラウザーから戻されるイベントの処理	40
第 4 章 セキュリティーと Common Event Infrastructure	43
第 5 章 Common Base Event ブラウザーのトラブルシューティング	47
特記事項	49
プログラミング・インターフェース情報	51
商標	51

第 1 章 Common Event Infrastructure 構成の除去

WebSphere Process Server をアンインストールする準備として Common Event Infrastructure 構成の除去が必要な場合は、まず最初に、デプロイされたエンタープライズ・アプリケーションおよびデータベース構成を除去しなければなりません。

Common Event Infrastructure は WebSphere Process Server の基本インストールにインストールされますが、まだ構成されていない場合はアクティブにはなりません。このトピックでは、以前に構成された Common Event Infrastructure のインスタンスを除去する方法のみについて説明します。Common Event Infrastructure の構成を除去するには、以下のステップを実行します。

Common Event Infrastructure アプリケーションの除去

イベント・サーバー・エンタープライズ・アプリケーションおよびリソースを WebSphere Process Server から除去する必要がある場合は、`event-application.jacl` スクリプトを使用します。

必要に応じて、`event-application.jacl` スクリプトを使用する代わりに管理コンソールを使用して、イベント・サーバー・エンタープライズ・アプリケーションを手動で除去できます。管理コンソールを使用する場合は、Common Event Infrastructure リソースも手動で除去する必要があります。これらのリソースについては、『Common Event Infrastructure の構成』のセクション内の『デフォルト構成』を参照してください。

イベント・サーバー・エンタープライズ・アプリケーションを除去するには、`wsadmin` ツールを使用して `event-application.jacl` スクリプトを実行します。

Windows システムでこのスクリプトを実行するには、`profile_root\event\application` ディレクトリーに移動して、以下のコマンドを(すべて 1 行で) 実行します。

```
wsadmin -f event-application.jacl -profile event-profile.jacl -action uninstall  
-node node_name -server server_name
```

Linux または UNIX システムでこのスクリプトを実行するには、`profile_root/event/application` ディレクトリーに移動して、以下のコマンドを(すべて 1 行で) 実行します。

```
wsadmin.sh -f event-application.jacl -profile event-profile.jacl  
-wsadmin_classpath install_root/event/lib/cei_installer.jar -action  
uninstall -node node_name -server server_name  
[-appname app_name] [-trace]
```

`event-application.jacl` スクリプトで使用するパラメーターは、次のとおりです。

`node_name`

イベント・サーバー・エンタープライズ・アプリケーションを除去する
WebSphere Process Server ノード。

server_name

イベント・サーバー・エンタープライズ・アプリケーションを除去する WebSphere Process Server。このパラメーターはオプションです。サーバーを指定しない場合、ノードのすべてのサーバーからエンタープライズ・アプリケーションが除去されます。

app_name

除去したいデプロイされたイベント・サーバー・エンタープライズ・アプリケーションの名前です。このパラメーターはオプションです。アプリケーション名を指定しない場合、すべての登録された Common Event Infrastructure エンタープライズ・アプリケーションが除去されます。

オプションの **-trace** パラメーターを使用すると、標準出力にデバッグに関する追加情報が出力されます。

イベント・メッセージング・エンタープライズ・アプリケーションの除去

Common Event Infrastructure をアンインストールする前に、イベント・メッセージング・エンタープライズ・アプリケーションを除去しなければなりません。

イベント・メッセージング・エンタープライズ・アプリケーションを除去するには、wsadmin ツールを使用して event-message.jacl スクリプトを実行します。

event-message.jacl スクリプトのパラメーターは、以下のとおりです。

node_name

イベント・メッセージング・エンタープライズ・アプリケーションを除去する WebSphere Process Server ノード。

ノード名を検索するには、*profile_root/bin/setupCmdLine* を実行してから、`echo $WAS_NODE` コマンドを実行します。

server_name

イベント・メッセージング・エンタープライズ・アプリケーションを除去する WebSphere Process Server。このパラメーターはオプションです。サーバーを指定しない場合、指定されたノードのすべてのサーバーからアプリケーションが除去されます。

app_name

除去するデプロイされたメッセージング・エンタープライズ・アプリケーションの名前です。このパラメーターは必須です。デフォルト値で Common Event Infrastructure をインストールした場合は、アプリケーション名は EventServerMdb です。

オプションの **-trace** パラメーターを使用すると、標準出力にデバッグに関する追加情報が出力されます。

イベント・データベースの除去

イベント・データベースを除去したい場合は、提供されたスクリプトを使用することができます。Common Event Infrastructure をアンインストールする前に、データベースを除去する必要があります。

データベースを構成する際に、構成スクリプトにより、データベースおよび Java Database Connectivity (JDBC) プロバイダーを除去するためのスクリプトも作成されます。イベント・データベースを除去するためのスクリプトは、*profile_root/event/dbscripts* ディレクトリーのデータベース専用サブディレクトリーに配置されます。JDBC プロバイダーを除去するためのスクリプトは、*profile_root/event/dsscripts* ディレクトリーのデータベース専用サブディレクトリーに配置されます。

注: イベント・データベースは、同じ JDBC プロバイダー構成を使用して複数のイベント・サーバーで共有することができます。このため、JDBC プロバイダー構成の除去を行うのは、関連するイベント・データベースをアンインストールした場合のみにしてください。

イベント・データベースおよび JDBC プロバイダーを除去するために、以下のテーブルから適切なスクリプトを実行します。

タイプ	オペレーティング・システム	データベース・スクリプト	JDBC 構成スクリプト
Cloudscape	Windows	rm_event_cloudscape.bat	rm_cloudscape_jdbc_provider.bat
Cloudscape	Linux/UNIX	rm_event_cloudscape.sh	rm_cloudscape_jdbc_provider.sh
DB2	Windows	rm_event_db2.bat	rm_db2_jdbc_provider.bat
DB2	Linux/UNIX	rm_event_db2.sh	rm_db2_jdbc_provider.sh
Oracle	Windows	rm_event_oracle.bat	rm_oracle_jdbc_provider.bat
Oracle	Linux/UNIX	rm_event_oracle.sh	rm_oracle_jdbc_provider.sh
Cloudscape	z/OS (Windows スクリプト)	rm_event_cloudscape.bat	rm_cloudscape_jdbc_provider.bat
Cloudscape	z/OS (Linux/UNIX スクリプト)	rm_event_cloudscape.sh	rm_cloudscape_jdbc_provider.sh
DB2	z/OS (Windows スクリプト)	rm_event_db2zos.bat	rm_db2zos_jdbc_provider.bat
DB2	z/OS (Linux/UNIX スクリプト)	rm_event_db2zos.sh	rm_db2zos_jdbc_provider.sh

適切なスクリプトを実行することによって、いつでも、イベント・データベースおよび JDBC プロバイダーを除去することができます。JDBC プロバイダーを除去するには、該当するスクリプトを使用し、JDBC プロバイダーを除去する有効範囲を指定します。

```
rm_db_jdbc_provider scope [server_name]
```

生成されたスクリプトはこれらのパラメーターを使用します。

scope JDBC プロバイダーを除去する有効範囲。有効な値は cell、node、および server です。

server_name

scope が server である場合に、JDBC プロバイダーを除去する WebSphere Process Server の名前。(scope が cell または node である場合、このパラメーターは無視されます)。

第 2 章 Common Event Infrastructure の管理

Common Event Infrastructure は、WebSphere Process Server のコア・コンポーネントです。

Common Event Infrastructure は、ランタイム環境で、さまざまなプログラミング環境からのイベントを永続的に保管および取り出すための機能を提供します。イベントは、イベントの構造を定義する標準の XML ベース形式である、Common Base Event モデルの標準を使用して表現されます (詳細については [../com.ibm.wsps.602.mon.doc/doc/cmon_event_catalog.dita](http://com.ibm.wsps.602.mon.doc/doc/cmon_event_catalog.dita) トピックを参照してください)。

Common Event Infrastructure は、イベント・データの管理用の標準の形式および機構を備えた WebSphere Process Server を提供します。以下の機能が提供されています。

- イベント・オブジェクトを作成し、保存し、送信して、後でリトリートする、WebSphere アプリケーションの標準インターフェースおよびサービス。
- (ソース) アプリケーションの作成に関連して、イベント・オブジェクトを登録アプリケーションに直接または Java Message Service (JMS) を通して間接的に渡す機能。

Business Process Execution Language (BPEL) ベースのプロセス用、およびデプロイメント記述子拡張子を基にした Enterprise JavaBeans (EJB) 呼び出し用のイベント・エミッターがあります。

- 保管されたイベントをブラウズするための Common Base Event ブラウザー。

インストール後の構成

Common Event Infrastructure の使用を開始する前に、インストール後の構成のタスクをいくつか実行する必要があります。

イベント・データベースの構成

データベースの構成には、必要なテーブルの作成や JDBC データ・ソースの構成も含まれます。

イベント・データベースでは、イベントの永続性をサポートする必要があります。新規イベント・データベースは、以下の環境のいずれかで構成する必要があります。

- Common Event Infrastructure の新規インストールの設定中。
- Cloudscape イベント・データベースを使用するよう構成された Common Event Infrastructure の前のバージョンからマイグレーション済み。これは、Cloudscape イベント・データベースでマイグレーションがサポートされていないためです。

イベント・データベースの構成 (Linux、UNIX、および Windows システム)

Cloudscape、DB2、または Oracle のデータベース・ソフトウェアを使用して、Linux、UNIX、および Windows システムでイベント・データベースを構成することができます。

イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

1. データベースを構成する WebSphere Process Server ランタイム環境を定義するプロファイルがある `profile_path/event/dbconfig` ディレクトリーに移動します。(`profile_path` は WebSphere Process Server プロファイルが含まれるディレクトリーへのパスに置き換えます。)
2. ASCII テキスト・エディターを使用して、提供されている以下のサンプル・データベース応答ファイルのうちの 1 つを開きます。使用するデータベース・ソフトウェアのサンプル応答ファイルを選択してください。

データベース	サンプル応答ファイル
Cloudscape	CloudscapeResponseFile.txt
Linux、UNIX、および Windows 用 DB2 Universal Database	DB2ResponseFile.txt
Oracle Database	OracleResponseFile.txt

3. このデータベース応答ファイルを使用している環境に合わせて変更します (すべての構文情報を含むパラメーターの詳細情報については、サンプル応答ファイルのコメントを参照してください)。

Linux、UNIX、または Windows システムで DB2 データベースを使用している場合、以下のパラメーター値を指定してください。

JDBC_CLASSPATH

DB2 JDBC ドライバーへのパス。

UNIVERSAL_JDBC_CLASSPATH

Universal JDBC ドライバーへのパス。

z/OS システムで DB2 データベースを使用している場合、以下のパラメーター値を指定してください。

DB_NAME

イベント・データベース用に作成した z/OS データベースの名前。

JDBC_CLASSPATH

DB2 JDBC ドライバーへのパス。

UNIVERSAL_JDBC_DRIVER_NATIVEPATH

Universal JDBC ネイティブ・ライブラリー・パスへのパス。

UNIVERSAL_JDBC_CLASSPATH

Universal JDBC ドライバーへのパス。

Oracle データベースを使用している場合、以下のパラメーター値を指定してください。

ORACLE_HOME

Oracle ホーム・ディレクトリーのパス。

JDBC_CLASSPATH

JDBC ドライバーのクラスパス。

4. データベース応答ファイル名をパラメーターとして指定して、ご使用のオペレーティング・システムのデータベース構成スクリプトを実行します。以下のコマンドの 1 つを使用します。

Windows システム

```
config_event_database.bat response_file
```

Linux および UNIX システム

```
config_event_database.sh response_file
```

例えば、Windows システムでは、`config_event_database.bat DB2ResponseFile.txt` というコマンドによって DB2 イベント・データベースが構成されます。

このスクリプトはイベント・データベースを構成し、2 つの JDBC データ・ソースを作成します。1 つはイベント・データベース用、もう 1 つはイベント・カタログ用です。データベースの構成が完了すると、メッセージが表示されます。

注: データベース応答ファイルに `EXECUTE_SCRIPTS=NO` が指定されている場合、生成したスクリプトを手動実行してデータベース構成を完了する必要があります。サンプル・データベース応答ファイルのデフォルト値は `EXECUTE_SCRIPTS=YES` です。リモート・データベースを使用する場合、`EXECUTE_SCRIPTS` の値を `NO` に変更し、スクリプトが含まれるフォルダーをリモート・データベース・サーバーにコピーしてから、そのサーバーからスクリプトを手動で実行する必要があります。

イベント・データベースの構成が終了したら、アプリケーション・サーバーを再起動する必要があります。

データベース構成スクリプトの手動実行:

データベース応答ファイルに `EXECUTE_SCRIPTS=NO` が指定されている場合、生成したスクリプトを手動実行してデータベース構成処理を完了する必要があります。

データベース構成には 2 つのステップがあります。まず、**config_event_database** スクリプトが環境に適したデータベース固有のスクリプトを生成します。次に、生成されたこれらのスクリプトがデータベースとデータ・ソースを作成します。データベース応答ファイルに `EXECUTE_SCRIPTS=YES` が指定されていると、**config_event_database** は自動的に両方のステップを実行します。ただし、データベース応答ファイルに `EXECUTE_SCRIPTS=NO` が指定されていると、生成されたスクリプトを手動で実行してデータベース構成を完了する必要があります。

サンプル・データベース応答ファイルのデフォルト値には `EXECUTE_SCRIPTS=YES` が指定されます。カスタマイズした応答ファイルでこの値を変更していない限り、生成されたスクリプトを手動で実行する必要はありません。

生成されたスクリプトを手動で実行するには、以下の処理を行います。

1. イベント・データベース作成用の生成されたスクリプトが含まれるデータベース固有のサブディレクトリーに移動します。

スクリプトは、使用しているデータベース・ソフトウェアによって以下のディレクトリーの 1 つに配置されています。

- *profile_path/event/dbscripts/cloudscape*
- *profile_path/event/dbscripts/db2*
- *profile_path/event/dbscripts/oracle*

profile_path は、イベント・データベースを構成している WebSphere Process Server ランタイム環境のプロファイルが含まれるディレクトリーへのパスに置き換えます。

2. 使用しているオペレーティング・システムおよびデータベース・ソフトウェア用の生成されたデータベース作成スクリプトを実行します。

Type	オペレーティング・システム	データベース・スクリプト
Cloudscape	Windows	cr_event_cloudscape.bat
Cloudscape	Linux/UNIX	cr_event_cloudscape.sh
DB2	Windows	cr_event_db2.bat
DB2	Linux/UNIX	cr_event_db2.sh
Oracle	Windows	cr_event_oracle.bat
Oracle	Linux/UNIX	cr_event_oracle.sh

3. JDBC データ・ソース作成用の生成されたスクリプトが含まれるデータベース固有のサブディレクトリーに移動します。

スクリプトは、使用しているデータベース・ソフトウェアによって以下のディレクトリーの 1 つに配置されています。

- *profile_path/event/dsscripts/db2*
- *profile_path/event/dsscripts/db2zos*
- *profile_path/event/dsscripts/cloudscape*
- *profile_path/event/dsscripts/oracle*

profile_path は、イベント・データベースを構成している WebSphere Process Server ランタイム環境のプロファイルが含まれるディレクトリーへのパスに置き換えます。別のサーバー上にインストールされたデータベースを使用する場合は、生成されるデータベース・スクリプトの全体のフォルダー (例えば、*profile_path/event/dsscripts/db2* フォルダー) をそのサーバーにコピーします。そのデータベース・サーバー上で、コピーしたスクリプトの場所に対してコマンド・プロンプトを開き、次のように、このスクリプトを実行してデータベースを作成します。

Windows システム

```
cr_event_db.bat server username
```

Linux および UNIX システム

```
cr_event_db.sh server username
```

パラメーターは、以下のとおりです。

server このコマンドがデータベースと同じコンピューター上で実行されていることを示します。

username

データベースにアクセスするための正当なユーザー ID

4. スクリプトを生成した元のサーバー上で、ご使用のオペレーティング・システムとデータベース・ソフトウェア用の以下の生成した JDBC 構成スクリプトを実行します。

Type	オペレーティング・システム	JDBC 構成スクリプト
Cloudscape	Windows	cr_cloudscape_jdbc_provider.bat
Cloudscape	Linux/UNIX	cr_cloudscape_jdbc_provider.sh
DB2	Windows	cr_db2_jdbc_provider.sh
DB2	Linux/UNIX	cr_db2_jdbc_provider.sh
Oracle	Windows	cr_oracle_jdbc_provider.bat
Oracle	Linux/UNIX	cr_oracle_jdbc_provider.sh

以下のコマンドを使用して、JDBC 構成スクリプトを実行します。

Windows システム

```
cr_db_jdbc_provider scope [server_name]
```

Linux および UNIX システム

```
cr_db_jdbc_provider.sh scope [server_name]
```

パラメーターは、以下のとおりです。

scope JDBC プロバイダーを構成する有効範囲。有効な値は、cell、node、server、または cluster です。

server_name

WebSphere サーバーの名前。**scope** が server の場合、JDBC プロバイダーを構成します。(scope が cell の場合、パラメーターは無視されません。)

注: 該当のデータベース・サーバーで有効なユーザー ID とパスワードを指定するためのプロンプトが表示されます。

イベント・データベースを構成したら、アプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

Cloudscape データベースの構成:

Cloudscape イベント・データベースを構成するには 2 つのステップを実行します。

Common Event Infrastructure を使用する前に、Cloudscape イベント・データベースを構成する必要があります。

1. データベース応答ファイルを作成します。データベース応答ファイルとは、イベント・データベースを構成するためのパラメーターを指定したテキスト・ファイルです。これらのパラメーターは、使用されているデータベースのタイプによって異なります。

2. データベース構成スクリプトを実行します。 Common Event Infrastructure は、イベント・データベースを構成し、アップグレードするスクリプトを提供します。次に、これらのスクリプトは、応答ファイルのパラメーターを使用して、カスタマイズされたデータベース特有のスクリプトを生成し、必要なデータベース構成を作成または変更します。

Linux、UNIX、または Windows システムでの DB2 データベースの構成:

Linux、UNIX、または Windows システムで DB2 イベント・データベースを構成するには、以下のステップに従います。

WebSphere Process Server プロファイル作成用のプロファイル・ウィザードを使用して DB2 イベント・データベースを構成できますが、DB2 を構成する前に以下のステップ 1 および 2 を手動で実行する必要があります。

1. リモート・システム上にサーバーが置かれている場合、DB2 クライアントで DB2 データベースを構成するときは、クライアント・システムがサーバーと通信するように構成されていることと、DB2 ノードがカタログされていることを確認してください。詳しくは、DB2 Universal Database 資料を参照してください。
2. Linux、UNIX システムで DB2 データベースを構成する場合は、以下のデータベース環境を調達してください。
 - a. `/etc/group` を変更し、`root` が `db2instance` と同じグループにあることを確認します。
 - b. `db2instance/sqllib/db2profile` スクリプトを実行してデータベース環境を調達します (`db2instance` は、使用するデータベース・インスタンスの名前に置き換えてください)。
3. データベース応答ファイルを作成します。データベース応答ファイルとは、イベント・データベースを構成するためのパラメーターを指定したテキスト・ファイルです。これらのパラメーターは、使用されているデータベースのタイプによって異なります。
4. データベース構成スクリプトを実行します。リモート・システム上にサーバーを持つ DB2 クライアント上で DB2 データベースを構成する場合は、生成されるデータベース構成スクリプトが含まれたフォルダーをリモートのデータベース・サーバーにコピーします。 Common Event Infrastructure は、イベント・データベースを構成するためのスクリプトを提供します。これらのスクリプトは、応答ファイル内のパラメーターを使用してデータベース構成を作成するための、カスタマイズされたデータベース固有のスクリプトを生成します。

Oracle データベースの構成:

Oracle イベント・データベースを構成するには、以下のステップに従います。

Common Event Infrastructure を使用する前に、Oracle イベント・データベースを構成する必要があります。

1. Oracle8i Database Release 8.1.7 およびタイプ 2 の JDBC ドライバーを使用している場合は、WebSphere 管理コンソールを使用して、Common Event Infrastructure データ・ソースの `Event_Oracle_JDBC_Provider` がクラスパス `$ORACLE_HOME/jdbc/lib/classes12.zip` を使用するように変更します。

2. Oracle8i Database Release 8.1.7 およびタイプ 4 JDBC ドライバーを使用する場合は、以下のコマンドのいずれかを実行します。
 - WebSphere 管理コンソールを使用して、Common Event Infrastructure データ・ソースの Event_Oracle_JDBC_Provider がクラスパス `$ORACLE_HOME/jdbc/lib/classes12.zip` を使用するように変更します。
 - <http://www.oracle.com> から `ojdbc14.jar` ファイルをダウンロードし、ダウンロードしたファイルを `$ORACLE_HOME/jdbc/lib` ディレクトリーに置きます。(データ・ソースを変更する必要はありません。)
3. イベント・データベースに使用するデータベースを作成します。データベースを作成するときに、適切な文字セットを選択します。
 - Oracle 9 データベースの場合は Unicode (AL32UTF8) を選択します。
 - Oracle 8 データベースの場合は UTF-8 を選択します。

Oracle クライアントからイベント・データベースを構成する場合は、このデータベース・インスタンスと通信するように、クライアントが構成されている必要があります。次のステップで、データベース応答ファイルに Oracle システム ID (SID) を指定します。デフォルト値は `event` です。

4. データベース応答ファイルを作成します。データベース応答ファイルとは、イベント・データベースを構成するためのパラメーターを指定したテキスト・ファイルです。これらのパラメーターは、使用されているデータベースのタイプによって異なります。

同じ Oracle データベースを使用する複数のイベント・サーバーをインストールする場合は、テーブル・スペース名がデータベース・インスタンス内で固有でなければならないことに留意してください。そのため、インストールするイベント・サーバーごとに異なるテーブル・スペース名が指定されるように、応答ファイルを変更する必要があります。

5. データベース構成スクリプトを実行します。Common Event Infrastructure は、イベント・データベースを構成するためのスクリプトを提供します。これらのスクリプトは、応答ファイルで指定されているパラメーターを使用してデータベース構成を作成するための、カスタマイズされたデータベース固有のスクリプトを生成します。
6. 以下の環境変数が設定されていることを確認してください。
 - `ORACLE_HOME` は Oracle インストール・ディレクトリーに設定する必要があります。
 - `PATH` には `$ORACLE_HOME/bin` および `$ORACLE_HOME/lib` が含まれている必要があります。
 - `LD_LIBRARY_PATH` および `LIBPATH` は `$ORACLE_HOME/lib` に設定する必要があります。
 - `CLASSPATH` には `$ORACLE_HOME/jdbc/lib/ojdbc14.jar` および `$ORACLE_HOME/jdbc/lib/nls_charset12.zip` が含まれている必要があります。

Oracle データベース制限:

Oracle データベース・ソフトウェアを使用した構成にはいくつかの制限が適用されます。Oracle イベント・データベースを構成した場合は、次の考慮事項に留意してください。

- Oracle 10g JDBC Thin ドライバーでは、Unicode 文字セットを使用する場合にストリング値のサイズ制限があります。そのため、大きい値 (長メッセージ属性など) を含むイベントがイベント・データベースに保管されると、Oracle ORA-01461 エラーが発生する可能性があります。この制限についての詳細は、Oracle 10g の資料を参照してください。

この問題を避けるには、Oracle 10g OCI ドライバーまたは Oracle 9i Thin ドライバーを使用してください。

- Oracle データベース・ソフトウェアは、ブランクのストリングを NULL 値として扱います。ブランクのストリングをイベント属性値として指定すると、そのストリングは、Oracle イベント・データベースに保管されるときに NULL に変換されます。

データベース応答ファイルの作成:

データベース応答ファイルは、イベント・データベース構成用のパラメーターを指定するテキスト・ファイルです。これらのパラメーターは、使用されているデータベースのタイプによって異なります。

既存の Cloudscape イベント・データベースをアップグレードする場合は、最初にデータベースを構成する際に使用したのと同じ応答ファイルを使用する必要があります。Common Event Infrastructure のインストール時に、この応答ファイルのバックアップ・コピーが作成され、*profile_root/event/dbconfig/CloudscapeResponseFile.bak* として保管されます。

データベース応答ファイルを作成するには、以下のステップに従います。

1. ASCII テキスト・エディターを使用して、いずれかのサンプル・データベース応答ファイルを開きます。これらのファイルは、*profile_root/event/dbconfig* ディレクトリーにあります。使用するデータベース・ソフトウェアのサンプル応答ファイルを選択してください。

データベース	サンプル応答ファイル
Cloudscape	CloudscapeResponseFile.txt
DB2 Universal Database for z/OS	DB2ZOSResponseFile.txt

2. データベース構成に合わせて応答ファイル内のパラメーターを適宜変更します。
3. 使用する Common Event Infrastructure インストール・ディレクトリーにファイルを保管します。変更された応答ファイルには、任意の名前を付けることができます。このファイルは、データベース構成スクリプトを実行する際に指定します。

Cloudscape データベース応答ファイル:

Cloudscape データベース応答ファイルは、Cloudscape イベント・データベースを構成するためのパラメーターを指定します。

Cloudscape データベース応答ファイルのサンプル *CloudscapeResponseFile.txt* は、*profile_root/event/dbconfig* ディレクトリーにあります。

この応答ファイルは以下のパラメーターを指定します。

SERVER_NAME=server

データベースがインストールされている WebSphere Process Server の名前。このパラメーターは、**SCOPE** パラメーターを **server** に設定した場合にのみ使用可能です。このパラメーターは、**SCOPE** が **cell** または **node** の場合は無視され、**SCOPE** が **cluster** の場合は無効です。サーバー名を指定しない場合のデフォルト値は **server1** です。

CLUSTER_NAME=

データベースがインストールされている WebSphere Process Server が含まれるクラスターの名前。このパラメーターは、**SCOPE** パラメーターを **cluster** に設定した場合にのみ使用可能です。このパラメーターは、**SCOPE** が **cell** または **node** の場合は無視され、**SCOPE** が **server** の場合は無効です。

SCOPE=[server|node|cell|cluster]

構成したデータベースの共有の有効範囲。これは、Java Database Connectivity (JDBC) データ・ソースが作成されている有効範囲になります。このパラメーターはオプションです。デフォルト値は **server** です。

DB_NAME=name

イベント・データベースの名前。このパラメーターはオプションです。デフォルト値は **event** です。

DB_SYSTEM_DIR=

Common Event Infrastructure データベースが作成されるディレクトリー。指定しない場合、デフォルトは *profile_root/event/CloudScapeEventDB* です。

JDBC_PROVIDER=provider

構成する JDBC プロバイダーの名前。この値は、WebSphere Process Server バージョン 5.1 以降でサポートされている JDBC ドライバーの名前である必要があります。Cloudscape JDBC プロバイダー (XA) ドライバーをお勧めします。

DB_TYPE=CLOUDSCAPE

構成されるデータベースのタイプ。Cloudscape データベースの場合、これは **CLOUDSCAPE** でなければなりません。

PAGE_CACHE_SIZE=size

データをキャッシュする場合に使用するメモリー・ページ数。ページのキャッシュ・サイズを増やすとパフォーマンスが高くなりますが、必要なメモリーも多くなります。キャッシュについては詳しくは、Cloudscape の資料を参照してください。このパラメーターはオプションです。デフォルト値は **4000** です。

LOG_DEVICE=path

トランザクション・ログが書き込まれるロケーションのパス。ログごとに別のデバイスを使用するとパフォーマンスが向上しますが、バックアップとリカバリーが複雑になります。このパラメーターはオプションです。

Linux、UNIX、Windows システム用 DB2 データベース応答ファイル:

Linux、UNIX、および Windows システムの DB2 データベース応答ファイルは、これらのいずれかのオペレーティング・システムで実行されている DB2 イベント・データベースを構成するパラメーターを指定します。

Linux、UNIX、および Windows システムの DB2 データベース応答ファイルのサンプル DB2ResponseFile.txt は、*profile_root/event/dbconfig* ディレクトリーにあります。この Linux、UNIX、および Windows システム用応答ファイルでは、以下のパラメーターを指定します。

SERVER_NAME=server

データベースがインストールされている WebSphere Process Server の名前。このパラメーターは、**SHARE_DB** パラメーターを **server** に設定した場合にのみ使用可能です。サーバー名を指定しない場合のデフォルト値は **server1** です。

CLUSTER_NAME=

データベースがインストールされている WebSphere Process Server が含まれるクラスターの名前。このパラメーターは、**SCOPE** パラメーターを **cluster** に設定した場合にのみ使用可能です。このパラメーターは、**SCOPE** が **cell** または **node** の場合は無視され、**SCOPE** が **server** の場合は無効です。

SCOPE=[server|node|cell|cluster]

構成したデータベースの共有の有効範囲。これは、Java Database Connectivity (JDBC) データ・ソースが作成されている有効範囲になります。このパラメーターはオプションです。デフォルト値は **server** です。

DB_NAME=name

イベント・データベースの名前。この名前は 8 文字以下でなければなりません。このパラメーターはオプションです。デフォルト値は、**event** です。

DB_NODE_NAME=name

データベース・サーバーのノード名。このパラメーターは、データベース・サーバーがリモートの場合のみ必要です。データベース・サーバーがローカル・システム上にある場合は必要ありません。

JDBC_PROVIDER=provider

構成する JDBC プロバイダーの名前。この値は、WebSphere Process Server バージョン 5.1 以降でサポートされている JDBC ドライバーの名前である必要があります。以下のドライバーをお勧めします。

- DB2 Universal JDBC ドライバー・プロバイダー (XA)
- DB2 レガシー CLI ベース・タイプ 2 JDBC プロバイダー (XA)

JDBC_CLASSPATH=path

JDBC ドライバーへのパスを含む (ファイル名は含まれません) 以下のいずれかのパスになります。

- DB2 Universal JDBC ドライバー・プロバイダー (XA) の場合:
db2jcc_license_cu.jar および db2jcc_license_cisuz.jar ファイルへのパス
- DB2 レガシー CLI ベース・タイプ 2 JDBC ドライバー (XA) の場合:
db2java.zip ファイルへのパス

UNIVERSAL_JDBC_CLASSPATH=path

DB2 Universal JDBC ドライバー・プロバイダーまたは DB2 Universal JDBC ドライバー・プロバイダー (XA) の場合、JDBC ドライバーのパス (ファイル名は含みません)。これは、db2jcc_license_cu.jar ファイルへのパスである必要があります。このパラメーターはオプションです。

JDBC_DRIVER_TYPE=type

JDBC ドライバーのタイプ。これは 2 または 4 のいずれかになります。

DB_HOST_NAME=hostname

データベース・サーバーのホスト名。このパラメーターは、**JDBC_DRIVER_TYPE** が 4 に設定されている場合に必要です。デフォルト値は localhost です。

DB_INSTANCE_PORT=port

データベース・インスタンスのポート番号。このパラメーターは、**JDBC_DRIVER_TYPE** を 4 に設定した場合に必要となります。デフォルトのポート番号は 50000 です。

EXECUTE_SCRIPTS=[YES|NO]

データベース構成スクリプトを自動的に実行するかどうかを指定します。このパラメーターを **NO** に設定すると、データベースを構成するスクリプトは生成されませんが実行されません。

DB_TYPE=DB2

構成するデータベースのタイプ。DB2 データベースの場合、これは **DB2** でなければなりません。

PAGE_SIZE_4K_BUFFER_POOL=size

データベースの 4K バッファ・プールのサイズを **KB** で表します。デフォルト値は 1500 です。

PAGE_SIZE_8K_BUFFER_POOL=size

データベースの 8K バッファ・プールのサイズを **KB** で表します。デフォルト値は 1500 です。

PAGE_SIZE_16K_BUFFER_POOL=size

データベースの 16K バッファ・プールのページ・サイズを **KB** で表します。デフォルト値は 1000 です。

LOG_FILE_SIZE=size

1 次および 2 次ログ・ファイルのサイズを 4 **KB** のページ数で表します。このパラメーターはオプションです。デフォルト値は 1000 です。

NUM_PRIMARY_LOG=n

使用する 1 次ログ・ファイルの数です。このパラメーターはオプションです。デフォルト値は 3 です。

NUM_SECONDARY_LOG=n

使用する 1 次ログ・ファイルの数です。このパラメーターはオプションです。デフォルト値は 2 です。

TRANSACTION_LOG_FILE=path

トランザクション・ログ・ファイルが書き込まれるロケーションへのパス。イベント・データベースのテーブルおよび索引とは異なるディスクにデータベース・トランザクション・ログを配置する場合、パフォーマンスが大幅に向上します。このパラメーターはオプションです。値を指定しない場合、デフォルトのロケーションが使用されます。

Oracle データベース応答ファイル:

Oracle データベース応答ファイルは、Oracle イベント・データベースを構成するためのパラメーターを指定します。

目的

CONFIGURE_DB が **true** に設定され、**DB_TYPE** が **ORACLE** に設定されている場合、これらのパラメーターは、インストール応答ファイルで指定することもできます。サンプル Oracle データベース応答ファイル `OracleResponseFile.txt` は、Common Event Infrastructure 開発システムの `profile_home/event/dbconfig/oracle` ディレクトリーにあります。

パラメーター

SERVER_NAME=server

データベースがインストールされている WebSphere Process Server の名前。このパラメーターは、**SHARE_DB** パラメーターを **server** に設定した場合にのみ使用可能です。サーバー名を指定しない場合のデフォルト値は **server1** です。

CLUSTER_NAME=

データベースがインストールされている WebSphere Process Server が含まれるクラスターの名前。このパラメーターは、**SCOPE** パラメーターを **cluster** に設定した場合にのみ使用可能です。このパラメーターは、**SCOPE** が **cell** または **node** の場合は無視され、**SCOPE** が **server** の場合は無効です。

SCOPE=[server|node|cell|cluster]

構成したデータベースの共有の有効範囲。これは、Java Database Connectivity (JDBC) データ・ソースが作成されている有効範囲になります。このパラメーターはオプションです。デフォルト値は **server** です。

ORACLE_HOME=path

Oracle ホーム・ディレクトリーのパス。

DB_NAME=name

イベント・データベースの名前。この名前は、Oracle システム ID (SID) として使用されます。このパラメーターはオプションです。デフォルト値は、**event** です。

JDBC_PROVIDER=provider

構成する Java Database Connectivity (JDBC) プロバイダーの名前。この値は、WebSphere Process Server バージョン 5.1 でサポートされている JDBC ドライバーの名前である必要があります。Oracle JDBC プロバイダー (XA) ドライバーをお勧めします。

JDBC_CLASSPATH=path

JDBC ドライバーへのパス (ファイル名は含みません)。

JDBC_DRIVER_TYPE=[thin|oci8]

JDBC ドライバーのタイプ。

DB_HOST_NAME=hostname

データベース・サーバーのホスト名。

DB_INSTANCE_PORT=port

データベース・インスタンスのポート番号。

EXECUTE_SCRIPTS=[YES|NO]

データベース構成スクリプトを自動的に実行するかどうかを指定します。このパラメーターを **NO** に設定すると、データベースを構成するスクリプトは生成されますが実行されません。

DB_TYPE=ORACLE

構成されるデータベースのタイプ。Oracle データベースの場合、これは、**ORACLE** でなければなりません。

SCHEMA_NAME=CEI

使用するデータベース・スキーマ名。これは常に **CEI** となります。

PROFILE=profile

Oracle データベースのスキーマ・ユーザーのプロファイルを指定します。デフォルト値は `cei_profile` です。

ROLE=role

Oracle データベースのスキーマ・ユーザーのアプリケーション・ロールを指定します。デフォルト値は `cei_role` です。

TABLE_SPACE_BASE_NAME=name

デフォルトのテーブル・スペース名を指定します。この名前は、18 文字以下でなければなりません。デフォルト値は `cei_ts_base` です。

TABLE_SPACE_BASE_PATH=path

デフォルトのテーブル・スペース・パスを指定します。デフォルト値は `cei_ts_base` です。

TABLE_SPACE_BASE_INITIAL_SIZE_MB=size

デフォルト・テーブル・スペースの初期サイズ (MB 単位) を指定します。デフォルトのサイズは 102 MB です。

TABLE_SPACE_NEXT_EXTENT_SIZE_MB=size

デフォルト・テーブル・スペースの自動増分サイズ (MB 単位) を指定します。デフォルトのサイズは 10 MB です。

TABLE_SPACE_TEMP_NAME=temp

一時テーブル・スペース名を指定します。この名前は、18 文字以下でなければなりません。デフォルト値は `cei_ts_temp` です。

TABLE_SPACE_TEMP_PATH=path

一時テーブル・スペースのパスを指定します。デフォルト値は `cei_ts_temp` です。

TABLE_SPACE_TEMP_SIZE_MB=size

一時テーブル・スペースの初期サイズ (MB 単位) を指定します。デフォルトのサイズは 7 MB です。

TABLE_SPACE_EXTENDED_NAME=name

拡張テーブル・スペース名を指定します。この名前は、18 文字以下でなければなりません。デフォルト値は `cei_ts_extended` です。

TABLE_SPACE_EXTENDED_PATH=path

拡張テーブル・スペースのパスを指定します。デフォルト値は `cei_ts_extended` です。

TABLE_SPACE_EXTENDED_INITIAL_SIZE_MB=size

拡張テーブル・スペースの初期サイズ (MB 単位) を指定します。デフォルトのサイズは 204 MB です。

TABLE_SPACE_EXTENDED_NEXT_EXTENT_SIZE_MB=size

拡張テーブル・スペースの自動増分サイズ (MB 単位) を指定します。デフォルトのサイズは 20 MB です。

TABLE_SPACE_CATALOG_NAME=name

イベント・カタログのテーブル・スペース名を指定します。この名前は、18 文字以下でなければなりません。デフォルト値は `cei_ts_catalog` です。

TABLE_SPACE_CATALOG_PATH

イベント・カタログのテーブル・スペース・パスを指定します。デフォルト値は `cei_ts_catalog_path` です。

TABLE_SPACE_CATALOG_INITIAL_SIZE_MB

イベント・カタログ・テーブル・スペースの初期サイズ (MB 単位) を指定します。デフォルトのサイズは 10 MB です。

TABLE_SPACE_CATALOG_NEXT_EXTENT_SIZE_MB=size

イベント・カタログ・テーブル・スペースの自動増分サイズ (MB 単位) を指定します。デフォルトのサイズは 5 MB です。

z/OS システムでの DB2 データベースの構成

DB2 データベース・ソフトウェアを使用して、z/OS システムでイベント・データベースを構成することができます。

リモート・クライアントから DB2 データベースを構成するには、最新のフィックスパックを含む DB2 Connect 製品をインストールする必要があります。

注: この手順は、z/OS システムで DB2 イベント・データベースを構成する場合のみ実行してください。

イベント・データベースを構成するには、以下の手順を実行します。

1. z/OS システムでは、DB2 管理メニューを使用して新規サブシステムを作成します。
2. ストレージ・グループを作成します。また、データベース応答ファイルにストレージ・グループ名を指定する必要もあります。デフォルト値は `sysdeflt` です。
3. WebSphere Process Server のデータ・ソースが使用するユーザー ID に対して必要な権限を付与します。このユーザー ID には、作成したデータベースおよびストレージ・グループへのアクセス権限がなければなりません。また、データベース用新規テーブル、テーブル・スペース、および索引を作成する権限も必要です。
4. リモート・データベースをカタログします。スクリプトまたは DB2 コマンド行ウィンドウのいずれかで、以下のコマンドを使用します。

```
catalog tcpip node zosnode remote hostname server IP_port system db_subsystem
catalog database db_name as db_name at node zosnode authentication DCS
```

ノードおよびデータベースをカタログする方法については、DB2 Connect の資料を参照してください。

5. リモート・サブシステムへの接続を確立できることを確認してください。この確認を行うには以下のコマンドを実行します。

```
db2 connect to subsystem user userid using password
```

6. ホスト・データベースにバインドします。以下のコマンドを使用します。

```
db2 connect to db_name user userid using password
db2 bind path/bnd/eddcsmvs.lst blocking all sqlerror continue message
      mvs.msg grant public
db2 connect reset
```

クライアントをホスト・データベースにバインドする方法については、DB2 Connect の資料を参照してください。

7. データベースを構成する WebSphere Process Server ランタイム環境を定義するプロファイルがある *profile_path/event/dbconfig* ディレクトリに移動します。(*profile_path* は WebSphere Process Server プロファイルが含まれるディレクトリへのパスに置き換えます。)
8. ASCII テキスト・エディターを使用して、DB2ZOSResponseFile.txt サンプル・データベース応答ファイルを開きます。
9. このデータベース応答ファイルを使用している環境に合わせて変更します (すべての構文情報を含むパラメーターの詳細情報については、サンプル応答ファイルのコメントを参照してください)。以下のパラメーター値を指定します。

DB_NAME

イベント・データベース用に作成した z/OS データベースの名前。

JDBC_CLASSPATH

DB2 JDBC ドライバーへのパス。

UNIVERSAL_JDBC_DRIVER_NATIVEPATH

Universal JDBC ネイティブ・ライブラリー・パスへのパス。

UNIVERSAL_JDBC_CLASSPATH

Universal JDBC ドライバーへのパス。

10. データベース応答ファイル名をパラメーターとして指定して、クライアント・オペレーティング・システムのデータベース構成スクリプトを実行します。次のコマンドを使用します。

```
config_event_database.sh response_file
```

このスクリプトはイベント・データベースを構成し、2 つの JDBC データ・ソースを作成します。1 つはイベント・データベース用、もう 1 つはイベント・カタログ用です。データベースの構成が完了すると、メッセージが表示されます。

注: データベース応答ファイルに EXECUTE_SCRIPTS=NO が指定されている場合、生成したスクリプトを手動実行してデータベース構成を完了する必要があります。サンプル・データベース応答ファイルのデフォルト値は EXECUTE_SCRIPTS=YES です。

イベント・データベースの構成が終了したら、アプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

z/OS データベース構成スクリプトの手動実行:

データベース応答ファイルに EXECUTE_SCRIPTS=NO が指定されている場合、生成したスクリプトを手動実行してデータベース構成処理を完了する必要があります。

これらのスクリプトを手動実行するには、以下の処理を行います。

1. `profile_path/event/dbscripts/db2zos` ディレクトリーに移動します。

`profile_path` は、イベント・データベースを構成している WebSphere Process Server ランタイム環境のプロファイルが含まれるディレクトリーへのパスに置き換えます。

2. SQL Processor Using File Input (SPUFI) を使用して、以下のように、生成された DDL スクリプトをロードして実行します。 スクリプトを以下の順序で実行します。

- `profile_path/event/dbscripts/db2zos/ddl/cr_db.db2`
- `profile_path/event/dbscripts/db2zos/ddl/cr_db_catalog.db2`
- `profile_path/event/dbscripts/db2zos/ddl/cr_tbl.db2`
- `profile_path/event/dbscripts/db2zos/ddl/cr_tbl_catalog.db2`
- `profile_path/event/dbscripts/db2zos/ddl/ins_metadata.db2`
- `profile_path/event/dbscripts/db2zos/ddl/catalogSeed.db2`

3. `profile_path/event/dsscripts/db2zos` ディレクトリーに移動します。

`profile_path` は、イベント・データベースを構成している WebSphere Process Server ランタイム環境のプロファイルが含まれるディレクトリーへのパスに置き換えます。

4. `profile_path/event/dsscripts/cr_db2zos_jdbc_provider` スクリプトを実行して、イベント・データ・ソースを作成します。 JDBC プロバイダーを構成する有効範囲を指定します。

```
cr_db2zos_jdbc_provider scope [server_name]
```

イベント・データベースを構成したら、アプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

z/OS システム用 DB2 Universal Database 応答ファイル:

DB2 Universal Database 応答ファイルは、z/OS システム上で DB2 イベント・データベースを構成するためのパラメーターを指定します。

z/OS システムの DB2 応答ファイルのサンプル `DB2ZOSResponseFile.txt` は、`install_root/event/dbconfig` ディレクトリーにあります。この応答ファイルは以下のパラメーターを指定します。

SERVER_NAME=server

データベースがインストールされている WebSphere Process Server の名前。このパラメーターは、**SHARE_DB** パラメーターを **server** に設定した場合にのみ使用可能です。サーバー名を指定しない場合のデフォルト値は `server1` です。

CLUSTER_NAME=

データベースがインストールされている WebSphere Process Server が含まれるクラスターの名前。このパラメーターは、**SCOPE** パラメーターを **cluster** に設定した場合にのみ使用可能です。このパラメーターは、**SCOPE** が **cell** または **node** の場合は無視され、**SCOPE** が **server** の場合は無効です。

SCOPE=[server|node|cell|cluster]

構成したデータベースの共用の有効範囲。これは、Java Database Connectivity

(JDBC) データ・ソースが作成されている有効範囲になります。このパラメーターはオプションです。デフォルト値は **server** です。

DB_NAME=name

イベント・データベースの名前。この名前は 8 文字以下で、かつ、既存のデータベース名でなければなりません。このパラメーターはオプションです。デフォルト値は **ceizos** です。

JDBC_PROVIDER=provider

構成する JDBC プロバイダーの名前。この値は、WebSphere Process Server バージョン 5.1 以降でサポートされている JDBC ドライバーの名前である必要があります。以下のドライバーをお勧めします。

- DB2 Universal JDBC ドライバー・プロバイダー (XA)
- DB2 レガシー CLI ベース・タイプ 2 JDBC プロバイダー (XA)

JDBC_CLASSPATH=path

JDBC ドライバーへのパス (ファイル名は含みません)。これは、以下のドライバーのいずれかです。

- DB2 Universal JDBC ドライバー・プロバイダー (XA) の場合:
db2jcc_license_cu.jar および db2jcc_license_cisuz.jar ファイルへのパス
- DB2 レガシー CLI ベース・タイプ 2 JDBC ドライバー (XA) の場合:
db2java.zip ファイルへのパス

UNIVERSAL_JDBC_CLASSPATH=path

DB2 Universal JDBC ドライバー・プロバイダーまたは DB2 Universal JDBC ドライバー・プロバイダー (XA) の場合、JDBC ドライバーのパス (ファイル名は含みません)。これは、db2jcc_license_cu.jar ファイルへのパスである必要があります。このパラメーターはオプションです。

JDBC_DRIVER_TYPE=type

JDBC ドライバーのタイプ。これは 2 または 4 のいずれかになります。

DB_HOST_NAME=hostname

データベース・サーバーのホスト名。このパラメーターは、**JDBC_DRIVER_TYPE** が 4 に設定されている場合に必要です。デフォルト値は **localhost** です。

DB_INSTANCE_PORT=port

データベース・インスタンスのポート番号。このパラメーターは **JDBC_DRIVER_TYPE** が 4 に設定されている場合に必要です。デフォルトのポート番号は 5027 です。

EXECUTE_SCRIPTS=[YES|NO]

データベース構成スクリプトを自動的に実行するかどうかを指定します。UNIX System Services を使用する z/OS システム上のデータベースを構成している場合、この値は **NO** に設定してください。

DB_TYPE=DB2ZOS

構成するデータベースのタイプ。DB2 for z/OS データベースの場合、このタイプは **DB2ZOS** にする必要があります。

EVENT_DB_NAME=*name*

イベント・データベースのデータベース名。この名前は 8 文字以下でなければなりません。デフォルト値は event です。

CATALOG_DB_NAME=*name*

イベント・カタログ・データベースのデータベース名。この名前は 8 文字以下でなければなりません。デフォルト値は eventcat です。

STORAGE_GROUP=*group*

イベント・データベースとカタログ・データベースのストレージ・グループ。これは、既存のストレージ・グループの名前である必要があります。デフォルト値は sysdeflt です。

BUFFER_POOL_4K=*name*

4K バッファーク・プールの名前。デフォルト値は BP9 です。

BUFFER_POOL_8K=*name*

8K バッファーク・プールの名前。デフォルト値は BP8K9 です。

BUFFER_POOL_16K=*name*

16K バッファーク・プールの名前。デフォルト値は BP16K9 です。

DAYS_TO_KEEP_EVENTS=*days*

イベントがページされる前にデータベースに保持される日数。この値への変更は、イベント・データを保管するテーブル・スペースに割り振られるストレージの量に大きな影響を与えます。デフォルト値は 1 です。

AVERAGE_EVENTS_PER_SECOND=*events*

1 秒ごとにデータベースに保管されるイベントの平均数。この値への変更は、イベント・データを保管するテーブル・スペースに割り振られるストレージの量に大きな影響を与えます。デフォルト値は 1 です。

AVERAGE_NUMBER_CONTEXT_PER_EVENT=*number*

イベント・インスタンス当たりのコンテキスト・エレメントの平均数。デフォルト値は 1 です。

AVERAGE_NUMBER_EXTENDED_DATA_ELEMENT_PER_EVENT=*number*

イベント・インスタンス当たりの拡張データ・エレメントの平均数。この値への変更は、拡張データ・エレメント・データを保管するテーブル・スペースに割り振られるストレージの量に大きな影響を与えます。デフォルト値は 5 です。

AVERAGE_NUMBER_EXTENDED_DATA_ELEMENT_ARRAY_ELEMENTS=*number*

配列データ・タイプである拡張データ・エレメントの平均数の値。デフォルト値は 5 です。

AVERAGE_NUMBER_MSG_TOKENS_PER_EVENT=*number*

イベント当たりのメッセージ・トークンの平均数。デフォルト値は 1 です。

AVERAGE_ASSOCIATIONS_PER_EVENT=*number*

イベント当たりのイベント・アソシエーションの平均数。デフォルト値は 2 です。

TABLESPACE_EXTENDED_BINARY_VALUE_PRIMARY=*size*

hexBinary 拡張データ・エレメント値を含むラージ・オブジェクト (LOB) テー

ブル・スペースの 1 次割り振り。通常、イベントが hexBinary 拡張データ・エレメント値を含んでいない場合は、この割り振りを小さくできます。デフォルト値は 1000 です。

TABLESPACE_EXTENDED_BINARY_VALUE_SECONDARY=*size*

hexBinary 拡張データ・エレメント値を含むラージ・オブジェクト (LOB) テーブル・スペースの 2 次割り振り。通常、イベントが hexBinary 拡張データ・エレメント値を含んでいない場合は、この割り振りを小さくできます。デフォルト値は 200 です。

TABLESPACE_ANY_VALUE_PRIMARY=*size*

any エレメントの値を含むラージ・オブジェクト (LOB) テーブル・スペースの 1 次割り振り。このとき、*any* エレメントは文字ラージ・オブジェクト (CLOB) です。通常、イベントが *any* エレメントを含んでいない場合は、この割り振りを小さくできます。デフォルト値は 1000 です。

TABLESPACE_ANY_VALUE_SECONDARY=*size*

any エレメントの値を含むラージ・オブジェクト (LOB) テーブル・スペースの 2 次割り振り。このとき、*any* エレメントは文字ラージ・オブジェクト (CLOB) です。通常、イベントが *any* エレメントを含んでいない場合は、この割り振りを小さくできます。デフォルト値は 200 です。

PERCENTAGE_FREE_SPACE=*percent*

各ページに残す、フリー・スペースの量 (パーセント)。挿入する行数の増加に従ってこの値を増やします。フリー・スペースがあると更新を効率的に行うことができますが、値を大きくするとディスク・スペースの使用量も増えます。デフォルト値は 20 です。

FREE_PAGE=*pages*

フリー・ページを残す前に埋めるページの数。このパラメーターを 0 に設定すると、フリー・ページは残されません。大量の SQL INSERT 処理が予想される場合は、このパラメーターをゼロ以外に設定します。(ゼロ以外の値はより多くのディスク・スペースを使用します)。デフォルト値は 10 です。

NUMBER_EVENT_DEFINITIONS=*definitions*

イベント・カタログに保管されるイベント定義の数。デフォルト値は 100 です。

AVERAGE_SOURCE_CATEGORY_PER_EVENT_DEFINITION=*categories*

イベント・カタログ中のイベント定義当たりのソース・カテゴリーの平均数。デフォルト値は 1 です。

AVERAGE_EXTENDED_DATA_ELEMENT_PER_EVENT_DEFINITION=*definitions*

イベント・カタログ中の各イベント定義の拡張データ・エレメント記述の平均数。デフォルト値は 5 です。

AVERAGE_PROPERTY_DESCRIPTIONS_PER_EVENT_DEFINITION=*definitions*

イベント・カタログ中の各イベント定義のプロパティ記述子の平均数。デフォルト値は 5 です。

TABLESPACE_HEX_DEFAULT_PRIMARY=*size*

hexBinary 拡張データ・エレメントのデフォルト値を含むラージ・オブジェクト (LOB) テーブル・スペースの 1 次割り振り。デフォルト値は 100 です。

TABLESPACE_HEX_DEFAULT_SECONDARY=*size*

hexBinary 拡張データ・エレメントのデフォルト値を含むラージ・オブジェクト (LOB) テーブル・スペースの 2 次割り振り。デフォルト値は 10 です。

データベース構成ログとメッセージ

イベント・データベースを構成および除去するスクリプトは 2 つのログ・ファイルを作成します。

- *profile_root/logs/events_db_install_trc.log* ログ・ファイル。詳細なトレース情報が含まれます。
- *profile_root/logs/events_db_install_msg.log* ログ・ファイル。データベース構成スクリプトによって生成されたメッセージが含まれます。

ログ・ファイルのメッセージの形式は以下のとおりです。

<Date> <month><year> <time><Class> <Methods><Type> <Message>

メッセージ文の各フィールドは以下のとおりです。

Class メッセージを生成するクラス名。

Method

ログ・メッセージを生成したメソッド。

Type 以下のメッセージ・タイプのいずれかになります。

- Entry
- Exit
- Error
- Information
- Warning

Message

メッセージのテキスト。

Common Event Infrastructure アプリケーションのデプロイ

プロファイルが Common Event Infrastructure を使用するように拡張されている各 WebSphere ランタイム環境に、イベント・サーバー・エンタープライズ・アプリケーションをデプロイする必要があります。

イベント・サーバー・エンタープライズ・アプリケーションは *event-application.ear* EAR ファイルにパッケージされます。**event-application.jacl** スクリプトにより、このアプリケーションは WebSphere Process Server にインストールされます。

1. アプリケーションをデプロイする WebSphere Process Server ランタイム環境を定義するプロファイルがある *profile_path/event/application* ディレクトリーに移動します。(*profile_path* は WebSphere Process Server プロファイルが含まれるディレクトリーへのパスに置き換えます。)
2. **wsadmin** コマンドを使用して、**event-application.jacl** スクリプトを実行します。

Windows システム

```
profile_path%bin%wsadmin [-conntype none] -profile event-profile.jacl  
-f event-application.jacl -action action -earfile event-application.ear  
-backendid backend_id -node node_name -server server_name  
[-cluster cluster_name] [-appname app_name] [-trace]
```

Linux および UNIX システム

```
profile_path/bin/wsadmin.sh [-conntype none] -profile event-profile.jacl  
-f event-application.jacl -action action -earfile event-application.ear  
-backendid backend_id -node node_name -server server_name  
[-cluster cluster_name] [-appname app_name] [-trace]
```

パラメーターは、以下のとおりです。

action

実行するアクション。エンタープライズ・アプリケーションをインストールする場合は、`install` を指定します。既にインストール済みであるイベント・サーバー・アプリケーションをアップデートする場合は、`update` を指定します。アップデートの実行中に、スクリプトは既存のアプリケーション EAR ファイルのバックアップ・コピーを現行ディレクトリーに作成します。必要な場合、後でこのバックアップ・コピーを使用して前のバージョンのアプリケーションをリストアできます。

backend_id

エンタープライズ・アプリケーションが使用するデータベースのバックエンドのタイプ。これは、必ず次の値のいずれかになります。

- CLOUDSCAPE_V51_1
- DB2UDBNT_V82_1
- DB2UDBNT_V8_1
- ORACLE_V10_1
- ORACLE_V9_1
- DB2UDBOS390_V8_1
- DB2UDBOS390_V7_1

node_name

イベント・サーバーがデプロイされる WebSphere Process Server のノード。ノード名を検索するには、以下のステップを実行します。

- a. ***profile_path/bin/setupCmdLine*** スクリプトを実行します。
- b. `echo $WAS_NODE` コマンド (Linux/UNIX システム) または `echo %WAS_NODE%` コマンド (Windows システム) を実行します。

この値は大文字小文字が区別されます。エンタープライズ・アプリケーションをクラスターにデプロイしている場合、このパラメーターは省略します。

server_name

イベント・サーバー・エンタープライズ・アプリケーションをデプロイする WebSphere サーバー。この値は大文字小文字が区別されます。エンタープライズ・アプリケーションをクラスターにデプロイしている場合、このパラメーターは省略します。

app_name

Common Event Infrastructure エンタープライズ・アプリケーションに使用する名前。このパラメーターはオプションです。デフォルト値は、`CommonEventInfrastructureServer` です。

オプションの **-trace** パラメーターを使用すると、標準出力に追加のデバッグ情報が表示されます。

注:

- `event-application.ear` ファイルのロケーションを示す完全修飾パスを指定する場合、Windows システムの場合も、パスにスラッシュ (`/`) を使用しません。
- アプリケーションをスタンドアロン・ノードにデプロイしている場合、オプションの `-conntype none` パラメーターを指定して、ローカル・モードで `wsadmin` を実行します。

`wsadmin` ユーティリティーについての詳細は、WebSphere Application Server 資料を参照してください。

`event-application.jacl` スクリプトが完了した後、Common Event Infrastructure エンタープライズ・アプリケーションが、指定されたサーバーまたはクラスターにデプロイされます。WebSphere Process Server Network Deployment 環境でアプリケーションが既にインストールされている場合、スクリプトは指定されたノードおよびサーバーのデプロイメント情報の追加のみを行います。

イベント・メッセージングの構成

Java Message Service (JMS) キューを使用してイベント・サーバーへの非同期メッセージ伝送を行う場合、イベント・メッセージングを構成する必要があります。

デフォルト・イベント・メッセージングの構成

非同期イベント伝送用のデフォルト・メッセージング構成では、WebSphere Process Server のデフォルト・メッセージング・フィーチャーを Java Message Service (JMS) プロバイダーとして使用します。

`default-event-message.jacl` スクリプトを使用すると、WebSphere のデフォルト・メッセージング・フィーチャーを JMS プロバイダーとして使用して、デフォルトのメッセージング構成を素早くセットアップすることができます。このスクリプトは、以下のように非同期イベントの送信に必要なすべての構成オブジェクトをセットアップします。

- デフォルト・メッセージング・フィーチャーを使用して、JMS キューおよびキュー接続ファクトリーを作成します。
- サービス統合バスを作成してそのバスにメンバーを追加し、バスをキュー、トピック、および接続ファクトリーに関連付けます。
- 作成されたキューおよびキュー接続ファクトリーを使用して、JMS 送信プロファイルを作成します。
- 作成された JMS 送信プロファイルを非同期イベント伝送に使用するよう、デフォルト・エミッター・ファクトリー・プロファイルを構成します。
- Common Event Infrastructure が、イベント・サーバーに非同期で送信されたイベントを受信する際に使用するメッセージ駆動型 Bean をデプロイします。

デフォルトのメッセージングを構成するには、以下の手順を実行します。

1. デフォルトのメッセージングを構成する WebSphere Process Server ランタイム環境を定義するプロファイルがある `profile_path/event/application` ディレクトリーに移動します。(`profile_path` は WebSphere Process Server プロファイルが含まれるディレクトリーへのパスに置き換えます。)

2. **wsadmin** コマンドを使用して、**default-event-message.jacl** スクリプトを実行します。

```
profile_path/bin/wsadmin.sh [conntype -none] -profile event-profile.jacl  
-f default-event-message.jacl -action install -earfile event-message.ear  
-node node_name -server server_name  
[-cluster cluster_name] [-appname app_name] [-trace]
```

パラメーターは、以下のとおりです。

node_name

メッセージング・アプリケーションがデプロイされる WebSphere Process Server のノード。ノード名を判別するには、以下の処理を行います。

- a. **profile_path/bin/setupCmdLine** スクリプトを実行します。
- b. `echo $WAS_NODE` コマンド (Linux/UNIX システム) または `echo %WAS_NODE%` コマンド (Windows システム) を実行します。

この値は大文字小文字が区別されます。アプリケーションをクラスターにデプロイしている場合、このパラメーターは省略します。

server_name

メッセージング・アプリケーションがデプロイされる WebSphere サーバー。この値は大文字小文字が区別されます。アプリケーションをクラスターにデプロイしている場合、このパラメーターは省略します。

app_name

メッセージング・エンタープライズ・アプリケーションに使用する名前。このパラメーターはオプションです。デフォルト値は、EventServerMdb です。

オプションの **-trace** パラメーターを使用すると、標準出力に追加のデバッグ情報が表示されます。

注:

- event-message.ear ファイルのロケーションを示す完全修飾パスを指定する場合、Windows システムの場合も、パスにスラッシュ (/) を使用します。
- メッセージング・アプリケーションをスタンドアロン・ノードにデプロイしている場合、オプションの `-conntype none` パラメーターを指定して、ローカル・モードで **wsadmin** を実行します。

スクリプトの開始後に、JMS ユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

他の JMS プロバイダーを使用したイベント・メッセージングの構成

イベント伝送で WebSphere Process Server のデフォルトのメッセージング・フィーチャーを使用しない場合、非同期メッセージ伝送で異なる Java Message Service (JMS) プロバイダーを使用するように構成できます。

外部 JMS プロバイダーを使用してイベント・メッセージングを構成する前に、まず使用している JMS プロバイダーに適したインターフェースを使用して JMS キューおよび接続ファクトリーを作成する必要があります。

event-message.jacl スクリプトは、WebSphere MQ のような外部 JMS プロバイダーを使用して、非同期イベント伝送に必要な構成オブジェクトをセットアップします。

- 有効範囲を指定した場合、指定の JMS キューおよび接続ファクトリーを使用して、JMS 送信プロファイルを作成します。
- 非同期イベント送信に、作成された JMS 送信プロファイルを使用して、エミッター・ファクトリー・プロファイルを作成します。
- Common Event Infrastructure が使用するメッセージ駆動型 Bean をデプロイし、リスナー・ポートか JMS 活動化仕様のどちらかを使用して、イベント・サーバーに対して非同期送信されたイベントを受信します。

イベント・サーバーに複数の JMS キューをセットアップする場合、異なるエンタープライズ・アプリケーション名および JMS キュー名を指定して、このスクリプトを複数回実行することができます。スクリプトを実行するたびに、追加のメッセージ駆動型 Bean がデプロイされ、新規リソースで指定された JMS キューを使用するように構成されます。

イベント・メッセージングを構成するには、外部 JMS プロバイダーを使用します。

1. デフォルトのメッセージングを構成する WebSphere Process Server ランタイム環境を定義するプロファイルがある *profile_path/event/application* ディレクトリーに移動します。(*profile_path* は WebSphere Process Server プロファイルが含まれるディレクトリーへのパスに置き換えます。)
2. **wsadmin** コマンドを使用して、**event-message.jacl** スクリプトを実行します。

```
profile_path/bin/wsadmin -profile event-profile.jacl -f event-message.jacl
-action install -earfile event-message.ear -node node_name
[-server server_name] [cluster cluster_name]
-appname app_name -qjndi queue -qcfjndi connection_factory
[-listenerport listener_port] [-activationspecjndi spec_name]
[-eventprofilescope scope] [-trace]
```

event-message.jacl スクリプトのパラメーターは、以下のとおりです。

node_name

メッセージング・アプリケーションがデプロイされる WebSphere Process Server のノード。ノード名を判別するには、以下の処理を行います。

- a. **profile_path/bin/setupCmdLine** スクリプトを実行します。
- b. `echo $WAS_NODE` コマンド (Linux/UNIX システム) または `echo %WAS_NODE%` コマンド (Windows システム) を実行します。

この値は大文字小文字が区別されます。アプリケーションをクラスターにデプロイしている場合、このパラメーターは省略します。

server_name

メッセージング・アプリケーションがデプロイされる WebSphere サーバー。この値は大文字小文字が区別されます。アプリケーションをクラスターにデプロイしている場合、このパラメーターは省略します。

オプションの **-trace** パラメーターを使用すると、標準出力に追加のデバッグ情報が表示されます。

注:

- `event-message.ear` ファイルのロケーションを示す完全修飾パスを指定する場合、パスにスラッシュ (/) を使用します。

- メッセージング・アプリケーションをスタンドアロン・ノードにデプロイしている場合、オプションの `-conntype none` パラメーターを指定して、ローカル・モードで **wsadmin** を実行します。

スクリプトの開始後に、JMS ユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

ランタイム構成

WebSphere Process Server 管理コンソールを使用して、またはコマンド行から **wsadmin** ツールを実行して、Common Event Infrastructure リソースを構成することができます。

管理コンソールで Common Event Infrastructure のリソースを参照するには、「リソース」リストを展開し、「**Common Event Infrastructure プロバイダー**」をクリックします。「**追加プロパティ**」リストにリソースのタイプが表示されます。このリストから各タイプの個々のリソースにナビゲートします (例えば、すべてのイベント・グループ・プロファイルやエミッター・ファクトリー・プロファイルのリストを表示できます)。リソースの構成を変更するには、リストでリソース名をクリックして、変更するプロパティを編集します。

管理コンソールおよび **wsadmin** ツールについて詳しくは、WebSphere Process Server のトピック `./com.ibm.wsps.602.adm.doc/overview/cadm_overviewadmin.dita` を参照してください。

ほとんどの場合、構成する必要があるのは特定のプロパティのみです。これらのリソースとそのプロパティについて詳しくは、WebSphere 管理コンソール内の Common Event Infrastructure リソースのオンライン・ヘルプを参照してください。

注: Common Event Infrastructure の構成を変更後、WebSphere サーバーを再始動する必要があります。

デフォルト構成

Common Event Infrastructure コンポーネントは、一連の WebSphere Process Server のアプリケーション、サービス、およびデフォルト・リソースとしてインストールされます。

提供されるリソースを構成、または追加リソースを作成して Common Event Infrastructure をカスタマイズできます。詳しくは、『ランタイム構成』を参照してください。

デフォルト構成は以下のオブジェクトからなっています。

Common Event Infrastructure サービス

WebSphere サーバーにインストールされたサービスです。このサービスによって、WebSphere アプリケーションおよびクライアントが Common Event Infrastructure を使用できるようになります。

Common Event Infrastructure エンタープライズ・アプリケーション

イベント・サーバーのエンタープライズ・アプリケーションです。エンター

プライズ・アプリケーションのデプロイメント記述子はイベント・サーバーと、それが使用する Common Event Infrastructure リソースを関連付けます。

Common Event Infrastructure メッセージング・アプリケーション

イベント・サーバーへの非同期イベント送信をサポートするメッセージ駆動型 Bean のエンタープライズ・アプリケーションです。このアプリケーションは、イベント・メッセージングを構成した場合にのみ使用可能です。詳しくは、26 ページの『デフォルト・イベント・メッセージングの構成』を参照してください。

Common Event Infrastructure プロバイダー

Common Event Infrastructure コンポーネント、イベント・ソース、およびイベント・コンシューマーで使用するリソースが含まれるコレクション・オブジェクト。

データ・ストア・プロファイル

データ・ストア・プロファイルは、デフォルトのデータ・ストア・プラグインが使用するプロパティを定義します。このプラグインは、イベント・サーバーで受信したイベントを永続的に保管するために使用されます。デフォルトのデータ・ストア・プロファイルが提供されています。通常、このリソースに対する構成は必要ありませんが、場合によっては、一部のプロパティを使用する環境に合わせて調整した方がよいことがあります。同じセルに複数のイベント・サーバーをセットアップする場合も、追加のデータ・ストア・プロファイルの作成が必要になることがあります。

イベント・バス伝送プロファイル

イベント・バス伝送プロファイルは、エミッターが EJB 呼び出しを使用して同期にイベント・サーバーにアクセスするときに使用されるプロパティを定義します。これらのプロファイルは、エミッター・ファクトリー・プロファイルによって使用されます。デフォルトの伝送プロファイルが提供されています。通常、このリソースの構成は不要です。

イベント・グループ・プロファイル・リスト

イベント・グループ・プロファイル・リストは、イベント・サーバーで使われるイベント・グループ・プロファイルが含まれるコレクションです。イベント・サーバーが使用するイベント・グループ・プロファイル・リストは、イベント・サーバー・エンタープライズ・アプリケーションのデプロイメント記述子で指定されます。通常、このリソースの構成は不要ですが、同じセルで複数のイベント・サーバーをセットアップする場合は、追加のイベント・グループ・プロファイル・リストを作成する必要があります。

イベント・グループ・プロファイル

イベント・グループ・プロファイルは、イベント・グループを定義します (イベントの論理コレクション)。イベント・グループは、イベントを内容に従ってカテゴリー化するときに使用します。イベント・サーバーからイベントを照会したり、イベント配布をサブスクライブする場合、イベント・コンシューマーはイベント・グループを指定して、そのグループのイベントのみをリトリブできます。

デフォルトのイベント・グループ・プロファイルが提供されています。このプロファイルは、すべてのイベントを含むイベント・グループを定義し、JMS トピック `jms/cei/notification/AllEventsTopic` に関連付けられています。

ご使用のアプリケーションに適合するイベントの基準を指定する、追加のイベント・グループ・プロファイルを作成できます。

エミッター・ファクトリー・プロファイル

エミッター・ファクトリー・プロファイルは、エミッターで使用されるプロパティを定義します。エミッター・ファクトリー・プロファイルのプロパティは、関連するエミッター・ファクトリーを使用して作成されたすべてのエミッターの振る舞いに影響を与えます。デフォルトのエミッター・ファクトリー・プロファイルは、同期伝送、フィルター処理なし、現行トランザクションの一部としての各イベントの送信を指定します。追加のエミッター・ファクトリー・プロファイルを作成して、異なるトランザクション・モードや伝送プロファイルを指定することもできます。

イベント・サーバー・プロファイル

イベント・サーバーが使用するプロパティを定義するプロファイル。デフォルトのイベント・サーバー・プロファイルはイベント配布とパーシスタンスを使用可能にします。また、デフォルトのデータ・ストア・プラグインを使用するように構成されています。通常、このリソースに構成は必要ありませんが、同じセルで複数のイベント・サーバーをセットアップする場合は、追加のイベント・サーバー・プロファイルを作成する必要があります。

JMS 伝送プロファイル

JMS 伝送プロファイルは、エミッターが JMS キューを使用して非同期にイベント・サーバーにアクセスするときに使用するプロパティを定義します。エミッター・ファクトリー・プロファイルによって参照されます。このプロファイルは、イベント・メッセージングを構成した場合のみ使用可能です。詳しくは、26 ページの『デフォルト・イベント・メッセージングの構成』を参照してください。

イベント・サービスの構成

イベント・サービスのオン/オフを切り替えるために、以下のステップを実行して、イベントの実行依頼に使用されるイベント・エミッター・プロファイル・ファクトリーの JNDI 名を指定します。

このタスクでは、以下のようになっていることを前提とします。

- Common Event Infrastructure サーバーをインストール済みである。
- Common Event Infrastructure メッセージ駆動型 Bean アプリケーションをインストール済みである。
- すべての Common Event Infrastructure リソースを構成済みである。
- WebSphere Process Server 管理コンソールにログインしている。

イベント・サービスでは、Common Event Infrastructure サーバーへのアクセスが提供され、WebSphere サーバーに関する情報および相関範囲情報が、イベント・インフラストラクチャーに渡される各イベントに自動的に組み込まれます。

イベント・サービスを構成するには、「サーバー始動時にサービスを使用可能に設定」プロパティを変更します。このプロパティは、特定のアプリケーション・サーバーのサービスを自動的に開始するかどうかを指定します。(Common Event Infrastructure エミッター・ファクトリーの JNDI 名を変更することもできます。ステップ 5 を参照してください。)

注意: イベント・サービスを使用不可にすると、Common Event Infrastructure サーバーでイベントが処理されなくなります。データベースにイベント情報は残らず、JMS 宛先にイベントは配布されません。

1. 管理コンソールのナビゲーション・ペインで、「サーバー」>「アプリケーション・サーバー」の順にクリックします。アプリケーション・サーバーのリストが、コンテンツ・ペインに表示されます。
2. 構成するアプリケーション・サーバーをクリックします。
3. 「Business Integration」テーブルで、「Common Event Infrastructure の宛先」を選択します。イベント・サービスのプロパティが、「構成」タブに表示されます。
4. 一般プロパティの下で、「サーバー始動時にサービスを使用可能にする」プロパティのチェック・ボックスを選択またはクリアします。

選択 [デフォルト] アプリケーション・サーバーが開始すると、イベント・サービスも開始します。この場合、イベントを生成するアプリケーションをこれらのアプリケーション・サーバー上で実行することができます。

重要: イベント・サービスは、イベント・モニターによって使用され、常に使用可能にする必要があります。

イベント・サービスを使用可能にすると、WebSphere サーバーに関する情報および相関範囲情報が、イベント・インフラストラクチャーに渡される各イベントに自動的に組み込まれます。

クリア アプリケーション・サーバーが始動しても、イベント・サービスは始動しません。イベント・サービスはイベント・モニターによって使用され、イベント・サービスを使用不可にすると、WebSphere サーバーに関する情報が自動的に収集されて各イベントに挿入されることはなく、相関範囲情報が作成されることもありません。

イベント・サービスを使用するアプリケーションを開始しようとする、その処理は拒否され、メッセージが発行されます。サーバーはアプリケーションなしで始動を継続します。

5. イベント・インフラストラクチャーへのイベントの実行依頼に使用されるイベント・エミッター・プロファイル・ファクトリーの Java Naming and Directory Interface (JNDI) 名を検査します。

以下の 2 つの方式の 1 つを使用して、JNDI 名を選択できます。

ドロップダウン・メニュー

この方式がデフォルトでは選択されており、Common Event Infrastructure プロバイダーのデフォルト・エミッター・ファクトリー JNDI を指定します。ただし、このメニュー上で他の名前を使用できる場合もあります。このメニュー上のデフォルト値は `com/ibm/events/configuration/emitter/Default` で、Common Event Infrastructure プロバイダーからのデフォルト・エミッター・ファクトリー JNDI であり、WebSphere デフォルト・プロファイルの一部です。代替プロファイルを生成していない場合は、このデフォルト値を受け入れます。

テキスト入力ボックス

プルダウン・メニューに適切な名前が表示されない場合は、この入力ボックスを選択して JNDI 名を入力できます。

6. 構成を保管および適用するには、「OK」ボタンをクリックします。
7. アプリケーション・サーバーを停止してから再始動して、変更内容を有効にします。

DB2 データベース保守

DB2 イベント・データベースを使用する場合は、提供されたスクリプトを実行してデータベース保守を定期的に行ってください。

これらの保守スクリプトの実行対象として現在サポートされる DB2 バージョンは以下のとおりです。

- DB2 Universal バージョン 8.1
- DB2 Universal バージョン 8.2.1

データベース統計の更新

DB2 データベースを使用可能にして、照会を最適化し、フリー・スペースを検出するために、`runstats` スクリプトを使用してデータベース統計を更新します。

データベース統計は、特に以下のいずれかの条件に当てはまる場合は、定期的に更新することをお勧めします。

- イベントがデータベースからパージされた場合
- 多数のイベントがデータベースに挿入された場合
- テーブルが、`reorg` スクリプトを使用して再編成された場合
- 索引がテーブルに追加されたか、テーブルから除去された場合

`runstats` スクリプトは、`install_root/event/dbscripts/db2` ディレクトリーにあります。

データベース統計を更新するには、以下のコマンドを実行します。

```
runstats.sh db_alias db_user [db_password]
```

パラメーターは、以下のとおりです。

db_alias

データベース別名。DB2 クライアントではイベント・データベースがカタログされている必要があります。DB2 サーバーでスクリプトを実行している場合、既にデータベースはカタログされています。

db_user

使用するためのデータベース・ユーザー ID。このパラメーターは必須です。

db_password

データベース・パスワード。このパラメーターはオプションです。コマンド行にパスワードを指定しないと、DB2 データベースはプロンプトを表示し、パスワードを指定するよう要求します。

例えば、以下のコマンドは、DB2 データベース統計を更新します。ここでは、データベース名は `event` で、データベース・ユーザー ID は `dbadmin`、パスワードは `mypassword` です。

```
runstats.sh event dbadmin mypassword
```

データベース・テーブルの再編成

イベントが DB2 イベント・データベースからパージされたあとで、reorg スクリプトを使用してデータベース・テーブルを再編成します。

reorg スクリプトは、*profile_root/event/dbscripts/db2* ディレクトリーにあります。

イベント・データベース・テーブルを再編成するには、以下のコマンドを実行します。

```
reorg.sh db2_alias db_user [db_password]
```

パラメーターは、以下のとおりです。

db2_alias

データベース別名。DB2 クライアントではイベント・データベースがカタログされている必要があります。DB2 サーバーでスクリプトを実行している場合、既にデータベースはカタログされています。

db_user

使用するためのデータベース・ユーザー ID。このパラメーターは必須です。

db_password

データベース・パスワード。このパラメーターはオプションです。コマンド行でパスワードを指定しない場合、DB2 データベースからプロンプトが出ます。

例えば、以下のコマンドは、イベント・データベース・テーブルを再編成し、データベース・ユーザー ID dbadmin、パスワード mypassword を使用し、データベース名は event です。

```
reorg.sh event dbadmin mypassword
```

reorg スクリプトを実行したら、runstats スクリプトを使用して、データベース統計を更新する必要があります。詳しくは、『データベース統計の更新』を参照してください。

イベント・データベースからのイベントのパージ

提供されているスクリプトを使用すると、イベント・データベースから多数のイベントを迅速にパージできます。

デフォルトのデータ・ストア・プラグインは、ユーティリティーのセットを提供しています。これらを使用すると、多数の古いイベントをイベント・データベースから定期的および迅速にパージできます。これらのユーティリティーは、指定した基準にマッチするイベントを削除する **eventpurge.jacl** イベント・サーバー・コマンドとは異なります。

この高速パージ機能では、**バケット**という概念が使用されます。バケットはテーブルのセットで、イベント・データベースのイベントの保管に使用されます。デフォルトのデータ・ストア・プラグインは 2 つのバケットを使用します。

- **アクティブ・バケット**は、最新のイベントを収容するバケットです。つまり、新規のイベントはアクティブ・バケットに格納されます。このアクティブ・バケットは、高速パージ・ユーティリティーを使用してパージすることはできません。
- **非アクティブ・バケット**は、古いイベントを収容します。非アクティブ・バケットに格納されるイベントは、照会、削除、または変更できますが、通常、新規のイベントは非アクティブ・バケットには格納されません。非アクティブ・バケットは、高速パージ・ユーティリティーでパージできます。

各イベントは 1 つのバケットにのみ格納されます。イベント・コンシューマーからは、アクティブ・バケットと非アクティブ・バケットの違いは見えません。コンシューマーは、特定のイベントを照会、変更、または削除できますが、この際イベントがどのバケットに格納されているか認識する必要はありません。この方法の利点は、データベース固有のインターフェースを使用して、アクティブ・バケットに影響を与えることなく、非アクティブ・バケットを迅速にパージできる点です。通常のイベント・トラフィックは、パージ操作の実行中も継続して実行できます。

非アクティブ・バケットのパージ後、バケットをスワップして、アクティブ・バケットを非アクティブ・バケットに、非アクティブ・バケットをアクティブ・バケットにすることができます。バケットのスワッピングが行えるのは、非アクティブ・バケットが空の場合に限ります。

注: 新規のイベントは、通常はアクティブ・バケットにのみ格納されますが、特定の条件下では、バケットのスワップ直後に新規イベントが非アクティブ・バケットに格納される場合もあります。データ・ストア・プラグインは、定期的にチェックを実行し、どのバケットが現在アクティブとマークされているか判別します。ただし、次のチェックが実行されるまで、一部のイベントは非アクティブ・バケット内に継続して格納されます。また、バッチの一部として送信されるイベントは、すべて同じバケット内に格納されます。これは、バッチの処理中にバケットが非アクティブになった場合も同様です。

この高速パージ機能を使用する場合、バケットをスワップする頻度、または非アクティブ・バケットをパージする頻度を決定するのはユーザーの責任になります。イベント・トラフィック、ストレージ・スペース、アーカイブ要件、およびその他の考慮事項に基づき頻度を決定してください。

アクティブなバケット状況の表示または変更

アクティブ・バケット状況では、現在どのバケットがアクティブか、および現在のバケットが非アクティブかが示されます。

アクティブ・バケット状況を表示または変更するには、**eventbucket.jacl** スクリプト (*profile_root/event/bin* フォルダ内にある) を次の例のように使用します。

```
wsadmin -f eventbucket.jacl [-status] [-change]
```

このコマンドには、以下のオプションがあります。

-status

このオプションを使用すると、現在のバケット構成についての情報を表示できます。例えば、アクティブ・バケットの設定、およびバケットのチェック間隔 (データ・ストア・プラグインが、どのバケットがアクティブか判定する頻度) を表示できます。

-change

このオプションを使用すると、アクティブ・バケットと非アクティブ・バケットをスワップできます。非アクティブ・バケットは空でないと、このオプションは使用できません。

非アクティブなバケットの消去

非アクティブ・バケットのパージ方法は、データベース・ソフトウェアにより異なります。

注: Cloudscape データベースは、高速パージ・ユーティリティーをサポートしていません。

DB2 データベース (z/OS システム) の非アクティブなバケットの消去:

z/OS システムでは、DB2 イベント・データベース用の高速パージ・ユーティリティーは、DB2 ロード・ユーティリティーを使用して実装されています。

非アクティブ・バケットをパージする方法

1. **eventbucket.jacl** コマンドを使用して非アクティブ・バケットを識別します (バケット 0 またはバケット 1)。
2. 適切なユーティリティー制御ファイルをアップロードします。これらのファイルは、データベースの構成中に生成され、*profile_path/event/dbscripts/db2zos* ディレクトリーに配置されます (*profile_path* は、WebSphere Process Server ランタイム環境のプロファイルを格納するディレクトリーのパスです)。以下ファイルのいずれかをアップロードします。
 - バケット 0 が非アクティブな場合、fastpurge00.ctl をアップロードします。
 - バケット 1 が非アクティブな場合、fastpurge01.ctl をアップロードします。

注: 制御ファイルは、論理レコード長 80 の固定レコード・フォーマットを使用してアップロードする必要があります。

3. z/OS ホストで、ISPF DB2I 基本オプション・メニューに移動し、「ユーティリティー」オプションをクリックします。
4. 以下の情報を指定します。

フィールド	値
機能	EDITJCL
ユーティリティー	LOAD
ステートメント・データ・セット	アップロードした制御ファイルを収容するデータ・セットの名前
LISTDEF	NO
テンプレート	NO

5. Enter キーを押して、次のパネルに移動します。
6. recdsn 入力フィールドで、アップロードした制御ファイルを収容するデータ・セットの名前を指定します。
7. Enter キーを押します。非アクティブ・バケットをパージする JCL スクリプトが生成されます。

8. Enter キーを押して、出力メッセージをクリアします。
9. 必要に応じて生成された JCL スクリプトを編集します。
10. JCL スクリプトを実行依頼します。

バケット確認間隔の変更

バケットの確認間隔は、DataStoreEjb.jar ファイルで指定します。

この値では、データ・ストア・プラグインがどのバケットがアクティブか判定する頻度を指定します。デフォルト値は 5 分 (300 秒) です。これより短い間隔を設定すると、スワッピング後にイベントが非アクティブ・バケットに格納される可能性は低下しますが、パフォーマンスも低下します。

バケット確認間隔の変更方法。

1. WebSphere Process Server 管理コンソールで、「エンタープライズ・アプリケーション」>「EventServer」>「EJB モジュール」>「DataStoreEjb.jar」>「デプロイメント記述子の表示」にナビゲートします。
 - a. DefaultDataStoreEJB パラメーターを探します。
 - b. <session id="DataStoreHelperEJB"> メニューを展開し、<env-entry-value> を探します。

これは、バケット・チェック間隔値で、秒数で設定します。
2. BucketCheckInterval 環境変数の値を変更し、秒単位でバケットの確認間隔を指定します。

第 3 章 Common Base Event ブラウザーでのイベントの表示

イベントを選択、ソート、および表示するには、Common Base Event ブラウザーを使用します。

このタスクでは、WebSphere Process Server 管理コンソールにログインしていることを前提としています。

イベント・ブラウザーは、イベント・アクセス・インターフェースを使用して、イベント・データを照会します。照会の結果はブラウザーに表示されます。

1. まずイベント・ブラウザーを開きます。管理コンソールのナビゲーション・ペインで、「統合アプリケーション」を選択してから「**Common Base Event Browser**」をクリックします。
2. 表示するイベントを指定します。
3. 戻されたイベントのビューを選択します。
4. どのブラウザー・パネルでも、検索基準またはソート基準の選択を完了したら、ブラウザー・パネルの下部にある「**イベントの取得**」ボタンをクリックして、イベントを表示します。

表示するイベントの指定

イベント・データベース内のイベントを照会する検索条件を指定する場合の Common Base Event ブラウザーの使用方法

このタスクでは、イベント・ブラウザーがすでに開かれており、「イベントの取得」パネルが表示されていることが前提となります。

「イベント・データ・ストア・プロパティ」フィールドの入力は必須です。「イベント・フィルター・プロパティ」フィールドはオプションで、時刻、日付、サーバー名、サブコンポーネント名、およびイベント重大度の各パラメーターを基にしてイベント検索対象を絞り込むことができます。

1. 必須: 検索するイベント・データ・ストアを指定します。

このフィールドは Java Naming and Directory Interface (JNDI) 名です。つまり、管理コンソールで構成可能な Enterprise JavaBeans (EJB) 参照です。WebSphere Process Server デフォルトは `java:comp/env/eventsaccess` ですが、Network Deployment 環境で作業している場合、別の名前を指定しなければならない場合があります (JNDI のネーミングについて詳しくは、『WebSphere Application Server for z/OS の製品資料へようこそ』を参照してください)。

2. 必須: 検索するイベント・グループを指定します。

これは、イベントの取得元となるイベント・グループです。デフォルト・グループは、`All events` です。

3. 必須: 取得するイベント数を指定します。

検索するイベントの最大数は 500 です。

4. オプション: レポートの作成日 (カレンダー期間) を指定します。
開始日と終了日を入力します。
5. オプション: レポートの作成時間 (時間枠) を指定します。
開始時刻と終了時刻を入力します。
6. オプション: サーバー名を指定します。
7. オプション: 該当する場合は、サブコンポーネント名を指定します。
8. オプション: イベントの優先順位を指定します。 取得するイベント優先順位の範囲は、0 (優先順位が最も低い) から 100 (優先順位が最も高い) です。
9. オプション: イベントの重大度を指定します。
取得するイベント重大度の範囲は、0 (重大度が最も低い) から 70 (重大度が最も高い) です。
10. 「イベントの取得」をクリックします。

検索条件に一致する Common Base Event の数が表示されます。照会の結果が表示されない場合は、「トラブルシューティングとサポート」PDF ファイルを参照してください。

戻されたイベントを表示するには、ナビゲーション・バーからビューを選択します。「すべてのイベント」、「BPEL プロセス・イベント」、「ユーザー・データ・イベント」、または「サーバー・イベント」の中からクリックできます。イベント・データを表示する場合は、「イベントの取得」をクリックすることによっていつでも検索条件を変更することができます。

イベントが戻されたら、それらのイベントを処理してさまざまなレベルのイベント詳細を取得できます。

イベント・ブラウザーから戻されるイベントの処理

照会により戻されるイベントを表示するには、イベント・ブラウザーを使用します。

このタスクは、トピック『表示するイベントの指定』の説明にあるように、実行依頼された照会によって戻されるデータに対して作用します。

照会により、基準を満たすすべてのイベントが戻されます。

1. ナビゲーション・バーからビューをクリックしてください。

ナビゲーション・バーには、戻された照会の次に示すビューが表示されます。

すべてのイベント

戻されたすべてのイベントです。

BPEL プロセス・イベント

特定のプロセス・インスタンスの Business Process Choreographer イベント。

ユーザー・データ・イベント

拡張名 `ECS:UserDataEvent` を持つイベントです。このイベント・タイプは、`ECSEmitter` クラスの `addUserDataEvent` メソッドによって作成されます。

サーバー・イベント

特定サーバーのイベント。

2. 以下のいずれかのアクションを実行します。
 - ステップ 1 で「**BPEL プロセス・イベント**」をクリックした場合は、プロセス・テンプレートをクリックしてからプロセス・インスタンスをクリックする必要があります。
 - ステップ 1 で「**サーバー・イベント**」をクリックした場合は、サーバーをクリックする必要があります。
3. イベントをクリックして、ブラウザー・ウィンドウの下部にあるペインにイベント・データを表示します。

第 4 章 セキュリティーと Common Event Infrastructure

WebSphere のメソッド・レベル宣言セキュリティーを使用して、Common Event Infrastructure 機能へのアクセスを制限できます。

Common Event Infrastructure では 6 つのセキュリティー・ロールが定義され、それぞれが関連する機能グループに関連付けられます。それらのセキュリティー・ロールにより、プログラミング・インターフェースとコマンド両方へのアクセスが制御されます。(Common Event Infrastructure のデフォルト構成では、これらのロールを使用する必要はありません。ただし、Network Deployment 環境では、WebSphere Process Server は Common Event Infrastructure のセキュリティー・ロールに割り当てられたのと同じユーザーでの認証が必要です。セキュリティー・ロールについては、WebSphere Application Server インフォメーション・センターで『セキュリティーの学習』および『ロール・ベースの許可』を参照してください。) 既に WebSphere Process Server の認証済みユーザーで、グローバル・セキュリティーをオンにしている場合は、Common Event Infrastructure リソースにアクセスできます。

注:

特定のユーザーをロールにマッピングすることによってセキュリティー・ロールを使用する場合は、認証済みユーザーと、そのセキュリティー・ロールに割り当てられたユーザーとが同じである必要があります。認証済みユーザーおよび RunAs ロールについての追加情報は、『RunAs ロールへのユーザーの割り当て』を参照してください。

次の表に、セキュリティー・ロールと、それぞれのロールに関連付けられているユーザーのタイプを示します。

表 1. セキュリティー・ロールとユーザーのタイプ

セキュリティー・ロール	ユーザーのタイプ
eventAdministrator	<p>イベント・データベースに保管されているイベントを照会、更新、および削除する必要のあるイベント・コンシューマー。このロールのユーザーは、次のインターフェースにアクセスできません。</p> <ul style="list-style-type: none"> • EventAccess.purgeEvents() • EventAccess.eventExists() • EventAccess.queryEventByGlobalInstanceId() • EventAccess.queryEventsByAssociation() • EventAccess.queryEventsByEventGroup() • EventAccess.updateEvents() • Emitter.sendEvent() • Emitter.sendEvents() • eventquery.jacl • eventpurge.jacl • emitevent.jacl • eventbucket.jacl
eventConsumer	<p>イベント・データベースに保管されているイベントを照会する必要のあるイベント・コンシューマー。このロールのユーザーは、次のインターフェースにアクセスできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • EventAccess.eventExists() • EventAccess.queryEventByGlobalInstanceId() • EventAccess.queryEventsByAssociation() • EventAccess.queryEventsByEventGroup() • eventquery.jacl
eventUpdater	<p>イベント・データベースに保管されているイベントを更新する必要のあるイベント・コンシューマー。このロールのユーザーは、次のインターフェースにアクセスできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • EventAccess.updateEvents() • EventAccess.eventExists() • EventAccess.queryEventByGlobalInstanceId() • EventAccess.queryEventsByAssociation() • EventAccess.queryEventsByEventGroup() • eventquery.jacl

表 1. セキュリティー・ロールとユーザーのタイプ (続き)

セキュリティー・ロール	ユーザーのタイプ
eventCreator	<p>同期 EJB 呼び出しを使用してエミッターにイベントを送信する必要があるイベント・ソース。このロールのユーザーは、次のインターフェースにアクセスできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Emitter.sendEvent() • Emitter.sendEvents() • emitEvent.jacl <p>注: eventCreator ロールでは、同期 EJB 呼び出しを使用してイベントを送信するようにエミッターが構成されている場合にのみ、イベント送信へのアクセスを制限します。エミッターがイベント送信の際に非同期 JMS メッセージングを使用する場合は、JMS セキュリティーを使用して、イベントの送信で使用される宛先へのアクセスを制限する必要があります。</p>
catalogAdministrator	<p>イベント・カタログのイベント定義を作成、更新、削除、または取得する必要があるイベント・カタログ・アプリケーション。このロールのユーザーは、EventCatalog インターフェースのすべてのメソッド、および eventcatalog.jacl スクリプトのすべての関数にアクセスできます。イベント・カタログに変更が生じるとイベントが生成されるので、このロールではイベント送信インターフェースにもアクセスできます。</p>
catalogReader	<p>イベント・カタログからイベント定義を取得する必要があるイベント・カタログ・アプリケーション。このロールのユーザーは、次のインターフェースにアクセスできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • EventCatalog.getAncestors() • EventCatalog.getChildren() • EventCatalog.getDescendants() • EventCatalog.getEventDefinition() • EventCatalog.getEventDefinitions() • EventCatalog.getEventExtensionNamesForSourceCategory() • EventCatalog.getEventExtensionToSourceCategoryBindings() • EventCatalog.getParent() • EventCatalog.getRoot() • EventCatalog.getSourceCategoriesForEventExtension() • eventcatalog.jacl (-listdefinitions option) • eventcatalog.jacl (-listcategories option) • eventcatalog.jacl (-exportdefinitions option)

注:

Common Event Infrastructure の機能を使用する場合に最も関係のあるセキュリティー・ロールは、**eventAdministrator** と **eventConsumer** です。

イベント・サーバーのメッセージ駆動型 Bean は、WebSphere Process Server のユーザー ID を使用して実行されます。非同期 JMS 送信を使用してイベントをイベ

ント・サーバーに送信し、メソッド・ベースのセキュリティーを使用可能にしている場合は、このユーザー ID を eventCreator ロールにマップする必要があります。

注:

Java 2 セキュリティーが使用可能になっている場合は、ポリシー・ファイルを変更して、特定の機能を利用できるようにする必要があります。

- イベント・ソース・アプリケーションを実行しており、自分のグローバル固有 ID (GUID) を生成する場合は、次の項目を追加します。

```
permission java.io.FilePermission "${java.io.tmpdir}${/}guid.lock",
    "read, write, delete";
permission java.net.SocketPermission "*", "resolve";
```

- XPath イベント・セレクターを使用してイベントをフィルターするデフォルトのフィルター・プラグインまたは通知ヘルパーを使用する場合は、次の項目を追加します。

```
permission java.util.PropertyPermission "*", "read";
permission java.io.FilePermission
    "${was.install.root}${/}java${/}jre${/}lib${/}jxpath.properties",
    "read";
```

第 5 章 Common Base Event ブラウザーのトラブルシューティング

主に 4 つの条件下では、Common Base Event ブラウザーにアクセスすることができません。

条件

「サーバーが見つかりません (Cannot find server)」

WebSphere Process Server (またはネットワーク・サーバー) が使用不可です。イベント・ブラウザ URI を起動しようとする時、「サーバーが見つかりません (Cannot find server)」ブラウザ・ページが戻され、サーバーが使用不可であることが示されます。この場合は、プロセス・サーバーの管理者に連絡して、問題の原因を判別する必要があります。

「ファイルが見つかりません」

WebSphere Process Server は使用可能ですが、イベント・ブラウザ・アプリケーションがサーバーにインストールされていないか、始動していません。イベント・ブラウザ URI を起動しようとする時、「ファイルが見つかりません」ブラウザ・ページが戻され、サーバーは使用可能であっても、そのサーバーでは URI が選択不可であることが示されます。この場合は、プロセス・サーバーの管理者に連絡して、問題の原因を判別する必要があります。

ログオン・パネルが表示される

WebSphere Process Server とイベント・ブラウザは使用可能ですが、正しいロールをマップしてイベント・ブラウザにアクセスできるようになっていません。ログオン・パネルによってプロンプトが出されます。ユーザー ID とパスワードを入力してログインしようとしても、ログインに失敗します。この場合は、プロセス・サーバーの管理者に連絡して、イベント・ブラウザを起動するための正当な許可を取得する必要があります。

「イベント・データの取得 (Get event data)」パネルにエラー・メッセージが表示される WebSphere Process Server とイベント・ブラウザが使用可能で、ユーザーもアクセスするための正当な許可を持っていますが、Common Event Infrastructure サーバーが使用不可です。「イベントの取得」ボタンをクリックすると、イベント・ブラウザの「イベントの取得」パネルにエラー・メッセージが表示されます。エラー情報は、メッセージ・ログに記録されません。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-8711
東京都港区六本木 3-2-12
IBM World Trade Asia Corporation
Intellectual Property Law & Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation 577 Airport Blvd., Suite 800 Burlingame, CA 94010 U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほめかしたり、保証することはできません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。© (貴社名) (年)。このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 © Copyright IBM Corp. _年を入れる_。 All rights reserved.

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

プログラミング・インターフェース情報

プログラミング・インターフェース情報は、プログラムを使用してアプリケーション・ソフトウェアを作成する際に役立ちます。

一般使用プログラミング・インターフェースにより、お客様はこのプログラム・ツール・サービスを含むアプリケーション・ソフトウェアを書くことができます。

ただし、この情報には、診断、修正、および調整情報が含まれている場合があります。診断、修正、調整情報は、お客様のアプリケーション・ソフトウェアのデバッグ支援のために提供されています。

警告: 診断、修正、調整情報は、変更される場合がありますので、プログラミング・インターフェースとしては使用しないでください。

商標

IBM および関連の商標については、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

この製品には、Eclipse Project (<http://www.eclipse.org/>) により開発されたソフトウェアが含まれています。



WebSphere Process Server for z/OS バージョン 6.0.2



Printed in Japan